

渋沢栄一伝記資料 第五十七巻収録 青淵先生演説速記集（一）より

【読み解き】

渋沢 栄一 小諸講演 演説全文

大正六年五月十五日 於 信州小諸

発行 特定非営利活動法人 糸のまち・こもろプロジェクト

会長ならびに満堂の諸君、今日は当青年会の春季大会をお開きになりますについて、私に参上いたして一場の所感を述べるようにという御相談を小山（久左衛門）君の令息邦太郎君からこうむっております、すなわち今日をとしまして参上いたして満堂諸君と御目にかかる機会を得ましたのであります。

かかる（このような）盛大な会に参上いたしました事は誠に初めてでございますが、私はこの信濃の御国には古いしがらみを持って居りまして、当小諸町にも青年のころに度々参りました事がございます。そゆう（昔訪れた）地というよりも、むしろ第二の故郷という程に思うのでございます。

しかしそれは六十年の以前の事でございますから、ほとんど面目を一変しまして、今朝も小山君の家で古書の手かがみを拝見いたしました時に百人一首がございましたが、「松も昔の友ならなく」という言葉がありました。私ですが、私の今日の境遇は、ほとんど昔の友達に松すら面影が無い、と思う位でございます。ましてや人であればなおさら。しかし右の様な古いしがらみをもって居ります

る御当地でございませぬので、たとえ初めて御目にかかる皆様にもなおかつ古い御親みのあつた心をもってこの会見を得るのを喜ぶのでございます。

昔旅行する際には、私は農業の暇に藍玉を商売して居りまして、御当地にも、なお南佐久にも、もしくは小県にも各地方を巡廻いたしましたして、取引上の友達も沢山ございましたが、多少文学を好みましたために、千曲川の南あたりでございませうか、しもがたという所に木内芳軒という人がありました。すでに故人になられました。このお人は詩づくりを巧みになさいまして、その遺稿もなお存して居るようでございます。これらは最も記憶に留まっているおひとりでございます。

その他その当時御こうぎりを厚くしましたお方はいは取引上に、あるいはその他に多くございますけれども、前にも申す通り、風景も土地もそのまま存して居りますが、その人は今や亡し。老人もある場合には長生をしたのを喜ぶと共に、また古い友達を亡くしましたのを悲しむという場合もないでもございませぬ。

この信濃の国は、その昔からして一体の氣風がいたつて純朴で、かつ他の地方に比較しますると、一切の風体が高尚であつて、ことごとくそうと申しあげることはい出来ないかも知れませぬが、おおむね貧富の懸隔の少ない土地だということを承知して居ります。今日においてもなおその旧態を存して居るように拝見されますのは、誠に理想的な地方と申し上げてもよからうと思ひます。

もちろん「一国の富はその国民富殖の大なるに帰する」のですから、ことごとく大なる富を成す事が望まほしい訳ではありませんけれども、その住民の多数ごとく皆富むわけにはいかぬ、その結果ある地方に大なる富者があると、そのきんぼうには必ずまたこれに反する貧しい者があつて貧富平均を得ぬということとはかく地方のならいであります。

そのはなはだしき懸隔が進んでいきますと、結局それは健康体ではありませんので、人の身体にしてもある一部分がいかに発達して、ある部分がごく貧弱であつたならば、かたわであると同様に、あまり「けんべいの

「へい」が強く進みますると、必ずその国の健全を失うようになる。ゆえに理想的の地方というならば、なるべく貧富を平均するようにありたい。当長野県と申し上げてよろしいか、全体は知りませぬが、少なくとも佐久・小県地方などは、私がせきねん旅行した際に左様な有様だということを見まして、今もなお、その旧態を有していることを喜ぶのでございます。

地方の物産としては種々なる物が数えられますが、特に養蚕に属する、あるいは蚕児の種、もしくは蚕糸これらは第一に指を折るべき物で、長野県下の蚕糸はほとんど日本の全国に冠たる、いな東洋に冠たる——日本の製糸産額がほとんど世界の半額以上に相成っている、その中の主たるものは長野県にある。もつとも諏訪地方の製糸家が、ただ単にその地方のみならず、各地に出張所を設けて、その地方の繭を買取り、製糸をするのが、なお諏訪の名によって輸出されるかも知りませぬけれども、とにかくに日本の最も特産物と申すべき蚕糸においては、すこぶる優等の地位を占めて居るのは当県であると申し

てよいのであります。

小諸町のごときも、昨日純水館の製糸場をごく概略拝見しましたが、実に総ての設備がよく届いて、かねて承り居った名にあいかなって、敬服いたして拝見いたしましたのであります。

しかしこの蚕糸の事業はまだ単に今日をもつて満足の位置と思わぬでよからうと考えます。これから先に進んでいく余地は、すこぶる多いように思います。ことにアメリカは絹物の需要の多い国柄で、近頃はことにその富の増すと同時にその需要もまたいささか繁盛に相成つて居るようにございます。もつとも原料の供給地はただ単に日本ばかりをもつて喜んで居る訳にはいかぬ、隣り国すなわち中国の養蚕は中々に悔り難い力を持つております。第一に桑園の地味がすこぶるよろしい、また繭のみかけは日本の品と較べますると見劣りがいたすようでありますけれども、糸の質が大変よろしいのであります。

昨日も純水館で白いの、黄いの、両種の青島（ちんとう）の物を一覽しましたが、わざ

にすでに日本のよりは糸の質においては上位に居るといってお話してございました。しかし青島（ちんとう）は中国における養蚕地の最も優良の場所じゃございませぬ。養蚕地のごく主なる所は江蘇・浙江が最も盛んでございます。

私は四年前に中国の旅行をいたしまして、彼の地の桑園を視て、実に悔り難いという感じを持ちまして、じらい（その後）中国の蚕業に対して、我が製糸家は最も注目すべきものであるという事を、現に純水館主の小山（久左衛門）君、またその令息の邦太郎君にも度々お話しをいたしましたけれども、その他の諏訪のお方、もしくは横浜の生糸を取扱いまする委託販売商店、ことに蚕糸に対して大日本さんし会という一つの法人団体が組み立てられまして、その会頭は子爵清浦奎吾君が任じて居られますが、この会に向かつてもしきりに愚見を呈して、今や追々中国の養蚕に對して御当地の方々、現に小山君などもその御一人である、諏訪に在る人、あるいは横浜の前に申した委託販売商店などで種々今研究中でございますで、果していかなる方法が

ここに案出されますか存じませぬが、ただ私のみが案じているわけではなく、一步進んで中国地方の蚕糸に対しても何ぶんの経営をなして、両国の製糸が相反し相衝突することのないようにして、ともに進むようにさせたいという考えを諸君が持つておられます。

私はそれに対して良い智恵を与へる事は出来ませぬけれども中国を一覧して来たという縁故もありますし、また従来蚕糸業に対しては学術上の智識は持つて居りませぬけれども、実験上から申すと青年の頃にさんじを養う事を努めましたし、壮年に至つては製糸に対して相当に力を添えまして、昔風の坐繰(さぐり)取りの糸では決して立派な糸が出来ない、ヨーロッパ・アメリカに充分生糸を販売する事は出来ない、やはり等しく西洋式の製糸法をやらねばいかぬというので、明治三年と覚えております、富岡の製糸場を、大蔵省に勤務中に起こさせまして、その後、機械取りの製糸が段々繁昌して今日に至つたのでございます。

これら工業につきましてもいささか微力

を入れたつもりでございます。さらに銀行業者と相成つて、それ以来は今の飼育法とか、製糸法とかの、すなわち農工の方は考えませぬけれども、今度は商いの側から、蚕糸に対して相当な御力添えをいたしたのでございます。なぜならば、いかに農家で充分の飼育をいたして蚕児が出来上がりまして繭になつても、工務が進んでこれを良い生糸にして売り出す方法が出来なければ、その農家の養蚕が發展する訳には参りませぬ。

しかし、たとえ製糸家が西洋式の製糸機械を備え付け、多数の繭を仕入れて製糸をいたしますといつても、自然に出来るものではない。繭も買わねばならず、出来た糸も売らねばならず、この売買の間には第一に必要なものは金融であります。この金融がこの製糸に対してごく簡便にかつその割合(金利)が低廉に得る事が出来ませぬば製糸事業の發展は出来ないでございます。ここに至ると商の勤めである金融家がこれに対して貪らざる疑わず、よく信じ、よく取扱つて金融をなさぬと、製糸家の事業もまた發展をいたしませぬ。かくのごとく農工商と相まつて始めて蚕

糸事業が完備をいたすのでございます。

前にも申し上げますとおり、御当地などで養蚕や、製糸は、こんなに發展はしましたけれども、まだまだなかなか進むべき余地は沢山ある。また外国特にアメリカと申してよろしうございますが、近頃はその他のインドなどにも絹物が沢山輸出されるような有様に進んでまいりましたように見えます。なるべく値を高くせずに、品物を精製して、向こうの好みに応ずるように売り出し得る事が出来ましたならば、例えば横浜の輸出高が昨年は四十万に近い梱数を出したのを、更に一割二割を年々に増やしていく事はさほど難しくない仕事だろうと思ひます。

あわせてこの養蚕事業は実に当国が最も首脳の位置に御座つて、全国みな長野県を視て経営すると申しても宜しいのでございませぬ、この点については諸君が充分他の地方に向つて誇りとなさるだけの位置を御占めなさつて御座るのであります。けれどもこの名譽は必ずその自家の責任に依つていつまでも保てるものであるのか、名譽と責任とはちやうどなえる繩のごときもので、ひとり名

誉ばかりで走る訳にかぬ、責任ばかりが残るものでもありません。

名誉があると必ず責任が存る。その責任をつくさぬと名誉は段々に無くなってしまふ、ゆえに長野県下の養蚕製糸家が前に述ぶるところごとく日本に冠たる今日、もし皆様がおこたつて養蚕もはなはだ不完全であり、製糸がせつれつに陥いる、割合は高いけれども品物は悪いということであつたらもうどうも長野県の製糸は困つたものだと、必ず反対のそしりを受けることは皆様の勤情により生ずるということ、常に御覚悟なさるようになりたいと思います。私が今ここに申し上げたいと思うことは、特にこの青年会に対して、青年の諸君に平素の所感を述べていささか御参考に供したいと思つて出たのでございます。ただ今まで申し述べましたのは、あるいは当地に縁故が深いとか、もしくは当地の特有産物は繭であるとかいうゆえん時事の愚見に過ぎませぬが、これより本問題の青年に対する希望を申し上げようと考えます。

近頃青年々々といつて、年の若いお方が世の中に幅を利かすようでございます。かく申

す私も青年を大事だと申して、しきりに青年のこぶしようれいの言葉を用いますけれども、その申す当人はというと、かのごとき老人である。どうもそう青年ばかり尊んで、老人はもう役に立たぬ者だと言われることは、この演説する自身からは、はなはだ不満足千万で（拍手起る）諸君からむしろ老人の方が尊いと言つていただきたいけれども、しかし悲しいかな老人先が短い、どうしても、いかに残念でも、この青年を尊重せざるを得ませぬから、どうぞその積もりにおぼしめし願いたい。

しかし人は年々に一つづつ歳を取つて参ります。私も昔からこの様な老人ではないので、やはり昔青年であつたのだから、これに較べて見ると諸君もやがては私のような老人になる事は、これはもう自然の道理で免れ得ないでありますから、青年決して青年をもつて安じて居る訳にはいかぬのであります。多分陶淵明の句でありましたか、「盛年不重来、一日難再晨、及時当勉励、歲月不待人」これは長い詩の中のある一部分でございます。あるいは朱文公の「少年易老学難成、一

寸光陰不可輕、未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋声」これはよく皆様が謳われて、学校に御出のお方は皆御熟読の言葉であります。

かくのごとくにこの青年をあるいは指導し、あるいは訓戒した事は、昔から沢山ございますけれども、私がここに申し上げます事は、決して訓戒とかいうようなものではございません。すなわち青年の皆様に対する自分の希望、御注意を、おそらくそうしたら良からうということをして二・三箇条として、ここに申し上げ試みようと思つてでございます。独り青年とばかりとは申しませぬが、総て人とは申したのでございます。しかしまず人の初まりは若い人でありますから、人はという中に必要条件としてはどうしても青年が一番先に含ませられるということ御理解なされたい。

人はいかなる人でもすべて相当なる目的があるものです。希望というものはどうしてもなければならぬものである。希望なしの人というものはいわゆる「睡生夢死」の人になる。この希望をも一つ進めて理想を持つ人にならねばいかぬです。理想という言葉はどう

も私はいささか漢学をいたしましたけれど、昔の論語や孟子に見えませぬ。しかしこれは人の地位から自分の希望、色々な物を組み立ててかくありたいという考案をその所へ作るのを、これを概括して理想といっているのだと思います。近頃出来たる「理想」という熟字であります。しかしこれは理想という熟字を用いなくても意志とか、意とか、もしくは希望とか、目的とか言うような文字が、すなわちこの理想の含まれている言葉であります。およそ物心ついて世に立とうというについては、どうしても理想というものを持たぬと完全な生活がなし得られぬようございませぬ。

そうしてその理想が、勿論人として、ことに青年としてまず第一に孔子の教訓してあります通り「弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有余力則以学文」これが即ち一の理想である。孝弟忠信をもって理想とし、更に力の余った時は相当なる趣味を持って、文という言葉は広い意味で、あるいは詩を学ぶのも文である。文章を書くのも文である。またさらに哲学を攻究するのも文でありま

しょう。あるいは物理化学にいたって種々学問的研究もある一部分には文を含むと見ましてよかろうと思ひます。で、いかなる身分にありましても、農業にあれば、商業にあれば、あるいは工業にあれば、またはある会社等の事務に従事する場合、もしくは会社等における総ての方面においておよそ自分の身を立てるについて、これから先かくしてこうありたいという考えは相当な程度においては我が理想というものをもって進むが、青年が身を立って行くについて必要條件とまで私は申し上げたいと思ひのであります。もしこれ無くしてただ成り行きにのみ任せて行くという事は、すなわち無目的の働きになりますから、必ずや自分の発達を為し得られぬものと申しても過言ではなからうと考えます。

私自身の事をここにお話しするもはなはだ余談のようになりますが、私は青年ころに自分の故郷に居ります時には、やはり農業にもっぱら力を尽して、自家の商売を満足させたいというのが理想でございました。しかるにこの理想が変化しましたのは、世の中のやむを得ざる時勢が私の理想として変化せしめたと申してもよかろうと考えます。ちょうど幕府の末、外寇が起り、政治がはなはだよろしきを失った有様であつて、私どものごとき地位もなし、学問もなし、格別得たところもありませぬけれども、いわゆる国を憂うの觀念から遂に最初立てました理想が變じて、いわゆる浪人社会に出て世の弊を救おうというような気を起こしました。しかしこれは私の思い違いでありましたが、これもやはり理想の一つではあつたのであります。理想によって進まんとしたのであります。

まするけれども、その理想をもって、これは倒れて止むまでの考えで居るのでございませぬ。

私は銀行を辞します時にしきりに皆に申しまして、ある職責は辞表でもって辞める事が出来るけれども、国民たる務めは辞表を出す事が出来ない（拍手起る）ゆえにこの満堂の諸君もある仕事については、嫌だと思えば辞表を出せませんが、国民たる務めは私と同じように誰も書面を出して国民を止めると言うことは御出来にはなさらない。必ずこの事を前提として、こういう時代にこういう事をして行きたい、ある事をうんぬんしたいと思いません、必ずこれを遂げ得るものでもございませぬけれども、ぜひ我が目的を立てその目的によって進んで行くという事は、ことに青年のお方々の世に身を置く事においてはなほ必要な、またその世に身を置く事において便利なものである、こう考えたがこうなつたという事は、数年の間には段々わかつて来るものでございませぬ。

もしそれがわからぬならば、それはあるいは己の志が變じて、立てた目的通りを遂げぬ

ということであれば、これは決してその効果を奏するものではない。いかんとなれば効果を奏せぬように自分でなさるのであるから、これは自分が自分の目的を棄てた以上は決してその目的が達し得られるものではありませぬ。

けれども、もしこれを懸命に貫徹せしめたならば必ずその効果が見えるものである。木を植えて育てるのでも、種子を蒔いて畑を耕すのでも、やはりこれも人の理想・目的によってその事が効を奏して来るのでありますから、大と小の差はございませぬけれども、人には必ず理想はなければならぬものである。しかしこの理想がただ単に人たる者は自己のみの利をもって理想とすることは、事によるとかえって自らの利益しか得られぬものである。およそ人たる者は独りで世の中に立つものではない。必ず共同的の者である。相群れをなし、相共に達するでなければ、決して小さい社会もなお成り立つものではありませぬ。ましてや大なる国家であればなおさら。

まあごく近い例を申しますと、私はふだ

んにも自分で銀行業者の寄り合いにも申しましたが、銀行のごとき商売は自分の資本で自分で経営する、自己だけで資本が沢山あれば繁昌する、発達が出来るかのように思うかもしれないが、これは大きな誤解であります。銀行家のごときは他の相たすけを受けて初めて商売の出来るものである。その周囲すなわち御得意が益々繁昌せねば決して銀行が繁昌するものではない。例えば農業を見てもそうです。自己の耕作物が、他の商売が繁昌し、他の工業が進歩してよく売れるにおいて、初めてその農業の利益を生ずる。すべて世の中は相持つて進んで行くものであります。ゆえに仏法は四つの恩の中に衆生の恩というものもを数え入れてありますくらいに、どうしても人は孤生するものではありません。独りで育ち生きていくものではありません。この道理から考えてみても、理想というものはただ自己の幸福、自己の便宜のみを理想とすべきものではありません。またそれでは決してその自身にも完全に発達し得るものではないと申すことは、ほとんど明らかな事だと思えます。

ゆえにこの人たるもののみならず第一に立てる理想、その理想の重要な所は必ず自己の利益のみでなしに、あるいは地方にあらばその地方の幸福、広く言えば国家、第一に他愛の心を理想といたして進んで行くという事が最も必要だろうと思います。

そうして必ず他を愛する、他のためをはかるといふ事が結局自己のためをはかる訳に相成る。私はふだん道德と経済とは必ず一致するといふことを主義として居ります。銀行業者などはとかく道德的な経営は出来得まじきもののごとく、昔から言いならされて、悪く申せば高利貸にもなる、こういう性質の業態に必ず道德と経済とが一致するといふことを申しましたがために、従来の有様から言うと、あまりうえんな、高尚な説を言うと人に評された位でございましたが、しかし長い経営から自身で考えて見ますと、決してそれが過つておらぬ、はたして人のためを思う経営が必ず自家のしあわせをなして来るといふことは事実において明らかでありませぬ。ゆえにまず立てる理想の中に、必ず理想といふものは自己の利益のみを第一とせぬ

理想といふものが最も肝要であるといふことを、理想を立てると同時に覚悟いたしたいと思ふのであります。

第二に申したいのは、青年は——とばかりではありませぬ、これもすべての人に対して申して良いのであります。その時代をよく知るといふことを、これがはなはだ肝要でございませぬ。その時はどういふ時であるかといふことをつまびらかに知る、むずかしい言葉で申すと「哲人機を知る之を思いに誠にす」といふ句がありますが、機を知るといふことはすなわちその時期を察するのでありまして、時代といふものは追々に変化していくものであります。

いつも同じ有様ではおりませぬ。これは人が団子を食べると彼岸だと思ふ、牡丹餅を食べると盆だと思ふといふだけのただ心無しに経過するといふことは、これは機を知るのではないのであります。時代の変化をよく察知するといふことは、広い言葉で言つと、すなわち天下を計略するにも機を知らねばいかぬが、またごく小さい言葉で言つと、麦を蒔くにも時を知らなければならぬ、蚕児を養

うにも八十八夜も来たから種子が青んで来たといふ考えを持たなければならぬ、この日常の場合に時を知るといふ必要がありますが、私はただ時計を見て時を知れ、時間を知れといふのではないのであります。

今の時代はどういふ有様であるかといふ事は、大なり小なり総ての方面によくこれを注意せねばならぬものでございませぬ。お集まりの皆様のお多くは実業界の諸君でお出でなさるだろうと思ひますが、日本の実業の変化の有様をことに概略申し上げると、御維新の初めと今日とは実に大なる変化をなしております。商業工業においてはヨーロッパ・アメリカの風習を学ぶように相成りまして、まったく時代が変化いたしましたと申してもよろしいのであります。この世の中に事業を経営する時には、ぜひこの時代はどういふ時かといふことを知つて、それに応ずるようになして働く。そうしなければ必ずそのよろしきを得る事は出来ませぬものでございませぬ。

ゆえに若いお方の今の理想をもつて世に立つには、どうしても今の時代がいかなる時代であるかといふことを知るのが最も肝要

である。そうして今日はどういう時代であるかという、これは最も喜ぶべき、また憂うべき時代にあるということに諸君は、御記憶ありたいと思います。その喜ぶべきわけはどうかという、このヨーロッパの大戦は従来の日本の段々欧米に学んで工業・商売の進歩して来た、彼等の盛んな時にはこの方が進もうとすると、向こうから押しこくって来て彼等と相闘っておったのが「彼に不幸、我れに幸」に、向こうが戦争のために商工業の進歩は停滞して参ったところからして、はなはだ有様が変化して、始終輸入に憂いておった日本が輸出勝ちになり、各種の工業もむしろヨーロッパに輸出するように進んで参りました。

まあこの事についてある種類には実に意外なる、利益を得て喜びをもって迎えている人が多いようございます。さりながらこれは必ずまた変化するものであるということに覺悟せねばならぬのです。戦争の終息した暁はどういう有様に変化して来るかという事が今日において大に注意せねばならぬ、すなわち現在の輸出入の順調になるとか、ある

いは正貨が沢山にあるとか、品物がたくさんに高く売れるとかいう喜びは、いかに変化するかという事をどうしても今日覺悟せねばならぬ時代に相成っております。独り今の戦争関係の時機を觀察するばかりではありませぬ。他の事物についてもすべて時代によく応ずるような考えを持ちませぬと、たとえば理想を持つておつても、その理想が首尾良くいきませぬとか、あるいは大なる過ちを生ずるといふ事があるものであります。

ゆえに青年の世に立つには第一に理想を立てる事が必要、第二にその時機を知るのが必要だということが最も御注意なさるべきものと考えます。

更に今一つ私は青年の諸君に最も重要な事をここに申し上げて置きたいと思うのは、すなわち言行が一致するということであり、ます。言う事と行う事が必ず一致するのです。言うは易くして行うは難しということは、昔から人のおしえている処でございますけれども、それは今日でもなおその通り、孔子の教えにも「言に訥(とつ)にして行に敏ならん事を欲す」なるだけ言議は少くして実行の

あがるように心掛けたいと教えられております。けれども人はただ言議を少なくと言つても唾(おし)で暮す訳には参りませぬ。

志というものは始終自分で言い、現すだけの力をもたねばならぬ、すなわち言葉ははなはだ大切である。その言葉を発するにはもちろん意があつて発するので、志である。志を発するのは言葉で、言葉を行うのは実行である。この言行が一つでなければ決して効果を奏するものでもなし、また人として他の信用を得るものでもない。事業の経営成功も決してよくし得るものではないと申し上げても過言ではないと思ひます。およそ人の世に尊ぶ処は、どうしても信用であります。あの人は信用がある、人格の高い人だと人に賞讃される人は、よく御觀察なさいませ。必ず言行が一致である。もし言行を齟齬する人でありましたならば、それで信用のあるという人はほとんど見ることの得られざる訳であります。

優れた英雄豪傑中にはあるいは言う程に行わぬ人が、必ずないとは申しませぬけれども、けだし(思うに)その言行がはなはだ合

しませぬと、いかに偉人であっても、信用という点からは多少欠ける処が生ずるのであります。ゆえに言行を一つにすることが、私は青年の最も注意をせにやならぬ処と深く信ずるのでございます。青年の諸君に対して私の希望いたしますことは数々あろうと思

います。しかしあまり多く申し上げる程時もございますし、またその事柄をもここに考えをもちませぬ。ただ第一に、どうしても人となつては必ず一つの理想を持つて世に進みたい、そうしてその進むや、その時代をつまびらかに知る事が必要である。またこれを知り、またこれを進むにおいて、言葉と行いと齟齬いたさぬようにするのが、はなはだその人の世に発達する秘訣であります。ここをもつて諸君は充分なる御注意あらんことを希望いたします。

はなはだ時間が迫つて参りましたので尚申し上げたいように考えます事もございませぬけれども、ただ要点をここに申し述べてこれでは御免をこうむります

(拍手起る)

(引用)

洪沢栄一伝記資料 第五十七巻 収録
青淵先生演説速記集(一) 自大正六年三月至大正七年十月 雨夜譚会本(財団法人竜門社所蔵)

【読み解きのかたち】

この読み解き資料は、「洪沢栄一伝記速記資料 小諸講演」原文を、読者が流暢に読み進められるよう、書き下しと口語での読みを織り交ぜたものです。また、振り仮名に関しては小林收先生の仮名振りを素地としています。辞書を調べても出ていない漢字もあり、読み切れない部分もありましたが、少なくとも「洪沢栄一翁の口から何が語られていたかがわかる」という目的に達し得る事ができたのではないかと考えています。

本来「読み解き」とは「漢字にルビと内容説明」であり、勉強としての性質が強いことが利点であり欠点でもあります。しかし、現代語訳は理解しやすい事が利点であり、反面では原文が崩れてしまふ事や、文中の真意が切り崩されるおそれがある事も事実です。小林先生には「新しい表記の仕方で良し」と仰っていたいただき、なるべく原文がそがれる事の無

いように工夫配慮しました。
どうぞ、洪沢栄一翁(当時七十七歳)のさわやかな弁舌をお愉しみ下さい。

発行日 令和三年六月二十九日

発行者 特定非営利活動法人

糸のまち・こもろプロジェクト
代表 清水寛美

振り仮名 小林 收
書き下し 中村完二郎